

平成三十年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・パネルディスカッション・質疑応答

著者	木村 清孝, 井川 裕覚, 池内 龍太郎, 勝村 聖子, 前田 伸子, 佐藤 慶太
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	24
ページ	35-49
発行年	2019-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000291



パネルディスカッション・質疑応答

パネリスト

木村 清孝

井川 裕覚

池内 龍太郎

勝村 聖子

前田 伸子

佐藤 慶太

司 会
閉会の辞

司会

それでは今からパネルディスカッションをさせていただきます。ちょっと風邪をひいております、聞き苦しい声で失礼いたします。私は本学の副学長をしております前田でございます。よろしくお願いいたします。実際に七年前のちょうど震災のときには、この建物におりました。基調講演をされた学長とこの建物に居たのですが、この建物が相当に揺れまして、このあたりは停電いたしました。電車が止まりました。従いまして、金曜日で附属病院がやっておりますので、附属病院に來られた患者さんが帰れなくなりまして、教職員も帰れなくなりまして、ちよつと五分ほど離れた所にあります学生食堂に、患者さんも含めて二百人くらいの人たちと過ごした記憶がございます。その時、繰り返し繰り返し、ひどい震災の、特に津波の映像がNHKで繰り返し流されまして、繰り返し繰り返し映像を見ながら、家に帰って一人で見ていたら、ちよつと耐えられなかったのではないかなど。これだけ非常事態で、患者さんと一緒に過ごしたことが精神衛生上良かったのではないかなというふうな記憶が

ございます。いくつか質問を頂いておりますが、お話をいただいた順番にお聞きしたいかと思えます。まず、基調講演の木村先生に質問ですが、平等思想はいつから起こってきたのでしょうかということなんでしょうけれども、こちらどうでしょうか。

木村

只今、平等思想ということについてのご質問なのですが、どういう意味でお使いいただいたのか、これだけではつきりわかりません。けれども、おそらく人間の平等のことを意味すると理解し、その上でお答えします。仏教では、釈尊の時代から人間存在についての平等性の考察はあつただろうと思います。ただし、人間といっても、人間だけではなく、衆生、さっきのことばを使いますと、有情ですね。広い意味で心あるもの、感覚・感情などを持った存在の中の一部として人間が捉えられていると考えられます。ですから、人間は、他の生き物たちとも基本的には同じであるという理解の仕方がベースにあるのではないかと思われれます。では、その人間について、価値的に見た場合、どういう意味で平等なのかということですが、釈尊の思想に原点をもつ流れで申しますと、私達は、共に迷いの中にある。煩惱をもち、いろいろなことに迷いながら、苦しみながら生きています。そういう意味で、生き物すべて同様の存在であるということなのです。だから、正しいあり方・生き方を見出して、本当の安らぎを求めて歩んでいきましよう、そういう方向性になると思います。ただ、大乘仏教になりますと、といっても大乘仏教にもいろいろな系譜があるのですが、特に日本などで広まりました大乘の思想では、人間はすべて仏の子である、仏となれる種を持っているところから、さらには仏そのものであるという考えも生まれました。要は、仏の悟りを実現できる、尊厳性に満ちた存在なのだという、そういう意味で平等であるということが説かれるようになります。このように、人間の平等性については、大きく二つの見方があると申し上げていいかと思えます。

司会

ありがとうございました。今、先生は話せば長くなるという感じのお話なのですが、実はコメントとして、ぜひ一回だけではなくて、五、六回の講義をもしできればということで計画させていただきたいと思います。ありがとうございます。

続きまして、臨床宗教師をされている井川さんと池内さん、両方にお聞きしたほうが良いのかも知れませんが、質問としては井川先生の所に書いてありました。臨床宗教師の実地で、全国に現在どれくらいいらっしゃるのですか、そういった実際に介護施設や訪問介護の場での、現場での活動の様子を教えてくださいませんかということなので、お二人からお答えいただければと思います。よろしくお願いいたします。

井川

ご質問いただきましてありがとうございます。どのくらいの臨床宗教師が、ということなのですが、二〇一一年から東北大学を中心に臨床宗教師研修というものが始まりまして、今ちょうど八年目ということになります。東北大学をはじめ、全国九大学とNPO法人の合計十団体がその養成を行っています。この鶴見大学さんもその一つで、関東では他に、上智大学や大正大学、武蔵野大学で養成を行っています。そしてその研修を修了した人は、延べおよそ二百五十人越えてきたかなというところで、今年の三月から始まった、日本臨床宗教師会の資格認定を受けた人が、およそ二百二十〜百三十人という形になっております。全国の施設の中での運営・実際ということでお話を頂きましたが、今現在、病院や福祉施設などで雇用を受けている人となると、その一割くらいというところです。中には臨床心理士や看護師であり、かつ臨床宗教師として活動しているような人もいて、いろいろな立場で雇用を受けている人がいます。それ以外にも、ボランティアを中心に動いている人たちも多数います。例えば、私の場合ですと、緩和ケア病棟でカフェ形式の傾聴活動などを行っています。先程写真しました写真などがまさにそうなのですけれども、病棟のラウンジで、時に

音楽の演奏をしたり、飲み物を提供したりしています。ラウンジに出て来られる患者様もいらっしゃれば、病室を一つ一つまわりながらリクエスタを受ける場合もあり、その流れの中でお話を聞かせていただいております。そのような活動が緩和ケア病棟では行われています。

池内

全部井川さんに言っていたので、私が話すことはないのですけれども、今日お話をさせていただいたお話し、割と臨床宗教師は人の生き死にの場面という所に深く関わるわけですから当たり前ですが、やはり人間が生きる理念も、当然そういったところから来ていますから当たり前といえば当たり前なのですが、やはり人間が生きていく中での悩みや苦しみといったものはなにも生き死にの場面だけではございませんで、それぞれのライフステージの中にどうしようもないのだけれど、なんとかして生きていきたいのだという、そういうふうな思っている人たちがいっぱいいるわけですね。例えば、臨床宗教師が活動している現場でいえば、私のフィールドは東京都内なので割と人口過密地域なのですけれども、そういったところでも古い団地などでも一人で孤独に生きている老人の方が沢山いらっしゃるのですね。いろいろなどころでは独居老人などという名前をつけているようですけれども、私はそういうことばは好きではないのですが、たまたまの境遇でお一人になられて、一生懸命生きているけど、孤独であるという方々などは沢山いらっしゃるのですが、そういった方々の自治組織と一緒にあって、団地の中で宗教師というか、お坊さんとか、神主さんとか、神父さんが一緒になってカフェやるからどうぞ出ておいでなさいよというふうに言っていて、なかにお誘いしてみんなでワイワイお話ししたり、何かイベント事があれば、夏ならお盆とか、お正月とか、12月ならクリスマスだとかいって、少しみんなでお茶飲んだりということなどもやっています。また、医療というものをある程度終えられて、それでは残りの余生を自分らしく過ごしたいという方がご入所されるホスピスという所がありますけれども、そう

いったところで臨死期の方に寄り添うといったこともありますし、緩和病棟といって、痛みを緩和することを目的にご入院なさっている方に寄り添うということもございます。当然、その在宅バージョンもございます。最近はやがて死にたいよという方もいらつしやうて、最後は病院を出てかれて、お家に帰ってという方もいらつしやいますので、そういった方々にはお家にお伺いして、という宗教臨床師もおります。あとは、やはりこれだけ経済的に豊かになっても、やはり一部には貧困というものは大きな問題でございしますので、特に食べられるものも食べられないというような状況で、生きている子供さんたちがいたりして、子ども食堂というのをやっているのだよというような臨床宗教師などもあります。私などもそうですけれども、働く人も働く人で今、非常に大きな悩みを抱える時代になりましたから、世にいう（不明）というやつですけれども、そういった方々に睡眠薬を出せばそれでみんな解決するのかというところではありませんので、働く人たちに対して、人生の悩みというものが出てきた時に、そこに一緒にお話をするというような臨床宗教師の姿なども私の発想の中にはあります。それも非常に、ニードと行ってよいのでしょうか、ご希望される方は多いという状況です。ですので、まとめますともちろん生き死にの現場でもやっていますし、人口過密地域での孤独ですとか子どもの貧困ですとか、働く人の人生の悩みですとか、本当に幅広く、その人達のライフステージに合わせてご対応させていただいているというのが、実態かと思えます。ただ、今、井川さんからお話がありましたとおり、日本全国隅々までインフラとして行き渡るほどにはまだ人数はいませんので、臨床宗教師一人一人が自分のフィールドで一生涯活動しているというのが実態でございます。これから先、すこしずつ臨床宗教師が増えていって、また社会的認知もされていって、信用もされていくことになればもう少し活動の幅も広がるのではないかなというふうに思っております。

司会

ありがとうございます。井川さんにもう一つですが、四十代の男性の、昨日死ぬと言っていたのに生きたいと思ったことばはとて心響きましたというご感想の後で、この方との語りというのをもう少し詳しくお話ししていただけたらありがたいですというコメントなのですが、何かもう少しございますか。

井川

個人情報の都合がありまして、あまり詳細に語ることはできないのですけれども、すごく大事なところは、きょうの講演で話させていただいたところです。当初、担当の看護師さんが私に繋がれたのは、やはり自分たちにどこまで本音を話してくれているのかわからないという思いがあつたそうです。それはやはり性別の違いなど恥ずかしくて話せない事があるかもしれないし、あるいは医療者は医療者としての関わり方があっても、傾聴する専門の方が入ることでまた別の関わりができるのではないかと、ということ繋いでいただいたのですね。当然この方もいきなり話されたわけではなくて、やはり様子を見ながら関わってくださいたわけです。もちろん具体的に話された内容も重要だつたんですが、その人がどうして私にそういう話をしてくださいのか、あとで看護師さんが聞いたそうです。それは、どうしてかという、一時間位ずっとお話ししてたんですけれども、私が僧侶だということもあつてずっと正座をしていたのですね。本当は段差の所に座って足がしびれてパンパンだつたんですけれども、ただその姿勢が本当に嬉しかったと言つたそうです。身寄りもなく社会との関係が絶たれつつある中で、そうやって自分と真正面から向かい合つてくれる、正座ですつと話を聞いてくれる、そんな若い人がいるということにすごく勇気を覚えたと言つたそうです。自分の死を思うより前に、本当はやはり社会とのつながりが無いということがその人の大きな痛みになっていたのではないかと感じています。それが、また違う形に展開していくというようなことが、そういうつながりの中で起こっていた。なんでもないような話なんですけれども、こういう人と向かい合う姿勢であつたりと

か、全人的というのですけれども、本当に人と人との裸の関わりの中で、つい一言、「生きたい」という思いが湧き上がってきたりする。対話の中で、起こりうる不思議について、あの方から教えていただいたような気がします。それから、こんなことも言っていたそうです。「自分が亡くなったらこの人拜んでくれるかな」って。そういうふうにいっていただけるのは宗教者としては本望なんですよ。菩提寺だからしかたなく頼みましたみたいな話がある中で、この人だったら拜んでほしいなど言ってもらった。何かこつちがいろいろなことを教えていただいた気がします。宗教者としてのあり方について、何かこうバトンパスを受けたような、そんな気持ちで、あの方の思いを味わいながら、今日、皆様にお伝えさせていただきました。ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。池内先生にご質問ですが、医師と神主と臨床宗教師と、三役をやっていられて、バランスはどう取っていらっしゃるのですかというご質問です。

池内 ご質問どうもありがとうございます。正直当初はバランスは取れませんでした。私が神主と医師を両方始めた当初はそれこそ悲惨なもので、自分でもすごく苦しんだのですけれども、医者の方に言っていることと、神主の時に喋っていて言っていることがまるきり違うということがありました。同じようなことを聞かれても答えが違ふというようなことがありました。例えば、すごくお年のおばあちゃまが、私はいいい歳だから入院などはしたくないのだということをしごく悩まれて、私の外来で相談されたことがあったのですけれども、私はその時医者として会っていましたから、「おばあちゃんそんな事言わないで、ご家族のみんなも応援してくれるのだから頑張ろうよ。入院して少しでも良くなったらみんなも幸せだしいいじゃない。頑張って入院しよう。」

といいました。私は医者として正しい、医者ならばそう言うのかなという感じですし、そう言うようにとも習ってきたものではありません。ただ、同じようなケースを神主をやっているときにも経験しまして、全く違うおばあちゃんですけれども、おばあちゃんは「もうこんな歳だから入院なんてしたくないのよ、もううちの娘がきたらいいんじゃないかって言ってよ、神主さん。」といわれたのですよ。その時、つい私の口から出たのが、「そうだね、おばあちゃん、もうそんなふうにおばあちゃん思っているのだったら、しっかりとそのことを娘さんにもわかってもらって、おばあちゃんが今一番、生きたいように、やりたいように、やっていけるように相談しましょうよ。」というふうに自然と答えていましたね。その時、そのあたりは、私が非常に悩んだ時期だったのですけれども、同じ私という人間から出てくることばが何か役割によって違うというのはおかしくてそんなことはとても申し訳ないことなのではないか、どちらかが嘘なのではないかと、非常に思っていたときがありました。そういつた時に、ちょうど臨床宗教師という活動を知りまして、臨床宗教師という研修を受けたり、もしくはその仲間たちと切磋琢磨することで、もしかしたらこのギャップが埋まるのではないかとというふうに私の中でも思ったことがあって、臨床宗教師になろうというふうに志したのですね。今はどうかというところ、もちろんそんなに都合よくすべてが上手く混ざるといことにはなっていないけれども、以前のような大きな隔絶といえますか、ギャップがある状態というのは脱出しまして、今はややグラデーションの形になっている。もちろん違うふうにも思うこともございますけれども、私の中から出てくることばにはある程度一貫性が生まれてくるように最近なっていたかなと、そういういたレベルですね。ですので、バランスが取れているかと言うとちよつと難しいのですけれども、これから先も一步一步精進して、最終的には何か、さらなる高みから達観して皆様のお心を支えるようなお言葉が一つでも二つでも出てくるようになったらそれは最高に嬉しいことだなと思つて活動している所存です。

司会 ありがとうございます。勝村先生に二つ質問が来ております。今日は三人の宗教者のなかでお話しづらかったと思うのですが、とてもよいお話ありがとうございますというコメントのあとに、警察官や行政は一定のルールに基づいて行動するイメージがあったのですけれども、このような大災害で機転のある行動をとった警察官や行政の方と思われるのですが、他にもいらっしゃったのでしょうかという質問です。

勝村 ご質問ありがとうございます。私自身が今日お話しした以外ではすぐに浮かんで来ませんが、たぶん多くの被災地に行っていた専門業者たちが本来であればやらなければならないような行動をしていたと思います。私達もご遺族と接するという勉強はしていませんでしたので、もしかしたらご遺族から話しかけられた時に「すみません、私はそのような立場ではないので、警察の人に聞いてください。」といった答えがマニュアル的には正しかったのかも知れないです。でも、そこでいたすべての人達が自分に何かできること、最低限でも何か一つでもやれることをというような思いがすごく強かった印象があります。多分私が知らないところでも行政・警察、そして自衛官、いろいろな方々がその場その場で、TPOに即した形で被災者の方々と接していらっしゃったのではないかと思っています。

司会 ありがとうございます。これはちよつとどういう、解剖的な話かな。被災地の遺体安置所で、お口を拝見して、所見後にこういったお口を閉ざすことができたのでしょうかというようなご質問ですが、

勝村 ありがとうございます。状況にもよるのですが、基本的に皆さん寒い中で亡くなっていらっしゃったので、口を閉じて、嘔み締めて亡くなっていらっしゃる方が多かったです。ですから逆に私達が口を開ける方が大変

でした。あとは死後変化の状況の中で遺体の硬直などもありますので、時間の経過とともに、警察や葬祭業者の方々が、それぞれご遺族がみて不快な思いをされないようにということで、対応してくださいと思います。

司会 ありがとうございます。木村先生に質問を戻します。まだちょっと時間がありませんので。「共成」ということばですが、詳しくもう少し説明してほしいということですので、葬儀とは亡くなった方に戒を授けるのが一つの意味ではあるので、生きているものと同じように対するということも、これも共成でしょうかという質問です。

木村 ご質問ありがとうございます。実はこの「共成」ということばは、おそらく私が創ったといえるのではないかと思います。もう十数年前から使いました。日本語の熟語としては共生（ともいき）を起源とする共生（きょうせい）も悪くはないのですけれども、共に生きているという事実をしつかりと捉える、仏教的に言えば縁起的な存在として共に在るということを知る、そういう方を自覚するというのは、もちろんとても大事で基本的なことです。けれども、もう一步踏み込んで、それを具体的な行動へと展開させるべきではないのかという思いが私にはありました。さきほどちょっと申し上げましたが、仏教の思想には社会性の面がやや薄い、社会的な問題についての認識もやや弱いです。特に現代のように文明が発展し、社会が工業化・情報化すればするほど、社会性の要素が希薄な思想は、訴える力を失ってきます。また、文明社会は、利己的な生き方をよしとする方向に収斂してきます。そういう中で、社会の現実をしつかりと認識し、縁起の真实性を信じる者同士が社会をよりよく変えていくために、連帯し、協働する。いい方向に行くように共

司会

に力を合わせて努めていく。そういうあり方を志向するのが共成なのです。この「共成」については、詳しくは別の論文（『南都仏教』第百号収録予定）でまとめていますので、刊行されたらご参照いただければ幸ですが、日本語的な読み方としては、共に成すことと、共に成ることという、二つの意味を兼ねさせています。同じあるべき存在と成っていくという、それが最終的な目標になるのですけれども、そういうものを目指して共に生き、共に成していくということです。別に、葬儀のことについてご質問が出ておりましたが、広くいえばこの共成は、私達の意識の問題としては、亡くなった方の思いや願いもしっかりと受け止める。また、これから生まれてくるであろうもの、そういう人々が懐くであろう思いも正しく推測し、共成の行動に組み込む。つまり、このあと二十年、三十年後に生まれてくる人間がどうなのだろう、かれらのためにはどうしたらいいのだろうかということも視野に入れる。そういうタテのつながりの認識と行動を心がける。さらには、人間だけを独立的に捉えるのではなく、ヨコのつながりも忘れない。私はかつて、「仏教者は、人間主義（ヒューマニズム）ではなく、衆生主義（サットヴィズム）に立つべきだ」などと論じたことがあります。要するに生きとし生けるものすべてが遺伝子的には同種であり、生態系においてもつながっているのだから、いわば仲間同士としての連帯性を踏まえた生き方を基本に置くべきなのではないかと思うのです。タテとヨコ、両面を考慮しつつ、「共成」を提唱しているわけです。

ありがとうございます。やはり五回くらいお話について伺わないとなかなか理解できないところもあるかも知れません。もうそろそろ、まだ時間ありますか。もうそろそろということですが、今までのご質問に対するご回答をお聞きになって、フロアから再度お聞きになりたいということがもしあれば、一つくらい受けられると思うのですが、いかがでしょうか。

フロア 都筑区に在住しております藤井と申します。本日はいろいろ勉強させていただきました。私、福島県は浪江で、今、放射線が非常に強い帰宅困難区域なので実家には帰れません。私は被災してから七年経ちますが、実家には帰れません。横浜在住は四十数年ありますが、実家に帰れないので里帰りも線香あげもなかなか困難であります。朝方ですね、私、宗派は真言宗なのですが、般若心経を一応パソコンで毎日、朝聞いています、この生活で良いのかどうか。地域のボランティア活動はいろいろとさせていただけますが、自分の生き方とすれば、どうなのかなと疑問を持っていますがどうなのでしょう。いろいろ難しいというか、自分自身の納得した生き方かどうかともそれも疑問視されますが、もう後期高齢者になっていてあの世も近いかなと思って、いろいろ高齢化で体に異常が最近非常に多くなっています、今後の生き方がどうなのか、これでいいのかどうかお聞きしたいと思います。すみません、長々と。ありがとうございます。

司会 真言宗ということですが、これは真言宗の僧侶井川さんでなければと。

井川 ご質問いただきましたありがとうございます。真言宗と聞こえてドキッとしたのですけれども(笑)、予感があたったような気がしております。浪江町のご出身で、いまこちらにお住いであると。実家のお墓参りとかできていないということをお聞きしまして、後期高齢者であるというようなお話もありましたが、歳を重ねられるにつれて、故郷に対する思いというものは、誰しもが強く持たれるものだなと思って、胸が暑くなるような思いを感じておりました。その中で、私などがアドバイスできることは無いのですけれども、真言宗つながりでご質問を頂いたということで、真言宗の側面から少しお話をさせていただけたらと思います。パソコンで毎朝般若心経をかけていただいているということでした。まず、パソコンで般若心経をかけら

れるスキルが素晴らしいなと思ったんですが…。それで十分かどうかという、そんな思いもどこか持たれているということでしょうか。真言宗では三密加持ということばがあります。三密というのは身口意といって、身体と口と心、この三つを整えることが重要で、そのような姿勢で神仏や先祖に向かっていくことが必要だと、そんなふうにいわれております。その中で「身」というのは身体のことですね。仏様のお姿を真似る、そういう修行を真言宗の僧侶はするんですけども、基本的には手を合わせる、合掌するというのが「身」です。それから身口意の「口」というのは口のことですね。お経であつたり、御真言と言われるような、真言宗では南無大師遍照金剛と唱えると思うのです。そういったお経をあげたりすることが「口」の意味するところですね。それで「意」というのは、意識の意を書いて、こころのことなんです。身口意、この三点セットがそろって真言宗の弔いとか供養というものがあるといわれるんですけども、この中で一番難しいのが三番目の「意」だと思っております。手を合わせるとか、お経をあげるのにはそれなりにできると思うんですけども、それだけではまだ形式的だと思うんです。一番大事なのは、そこに心が伴っているかということ。そこがすぐ問われているのが真言宗のあり方ともいえます。パソコンで般若心経をかけられた、これが良いのか悪いのか思うところもあるのかもしれないですけども、私は良いと思っております。また、手を合わせる、合わせないにも、美しくない合掌とか、きれいな合掌とは、いろいろあるんかもしれないですね。でも、それより、そういうふるさとへの思いを持ちながら、私はこれで良いんだろうかと迷っているということですよ。迷いながらそこに向かっていたら、その「意」、つまり、その心が私は本当に大事だなと思っております。真言宗は悟りを得ることを目的とした宗派とも言えるわけで、そんなこと本当にできるんですかとよくいわれるのですが、私はそうではなくて、悟りを求めながらも「迷っていること」自体に光があると思います。そこに仏性、仏の種があり、また仏様の力があるのだと考えるのが真言宗ではないか。ご実家に

帰ってお墓参りができない、線香があげられないという悩み、これは本当に心が痛い所なんですけれども、その中で迷いつつ自分のあり方を模索されている姿、これがおそらく菩薩道といわれるものかなと思います。本当に素晴らしい毎日を送られているのだというふうに私は思いました。どうかそんな思いを大事に、毎日過ごしていただけたら嬉しいなと申し上げて、私からの回答させていただきます。ありがとうございます。

司会 今日、午後から今まで長い時間、非常に有意義な、有益なお話、心に沁みるお話を伺いまして、四人の先生方に今一度拍手をいただきまして、本日はどうもありがとうございます。

佐藤慶太 その上司の佐藤でございます。そんなにそっけないメールだったかは、ちょっと覚えていないのですけれども、彼女と合流いたしましたして、確かに発災三日後には岩手県宮古の体育館におりました。止めどなくというような表現で良いのでしょうか、ご遺体がどんどん搬入されてきます。その光景をみた私は、素直に申し上げますと「もう帰れない」と思いました。一体、何万人の人が、いや何十万人の人が犠牲になっているのだろうか。そういう情報がまだわかりませんからどうか部下だけは帰さなくてはいけなかと考え、非常に悩んでいたのをはつきりと覚えております。結局一週間後に、東京に戻る警視庁機動隊のバスに便乗して、全員が帰ることができたわけですが、私がその夜から、東日本大震災について考えたこと、これはまだ問題として解決しておりませんけれども、大規模災害とはこういうものなんだと捉えたこと、今日のシンポジウムの先生方にそのまま解説していただいたと思います。つまり、大規模災害とは、人の生活や人生において、一番大事な人、それらは、父・母・妻・夫・子ども・孫・愛する人・仲の良い友人、そして一番大事なものの、家などは最たるもの、いただいたプレゼント、それこそ位牌や、或は墓所、こういうものが一つではなくて

全部、瞬きするような極めて短時間の内に失われてしまうです。そういう容赦のないことなのだ。池内先生のお話にありましたけれども、やはり悲しみの準備ができていないのですね。その悲しみの準備ができていない方々に、いきなりとんでもない重さの悲しみが襲いかかり、それを押し付けてくるわけです。もしあの場に臨床宗教師という方がいらっしやれば、その負担の仕方は何か違ったのではないのかなというふうにも思い、大変に微力ではあるのですが、本学の臨床宗教師育成事業に関与させていただいている、そういった契機になりました。

本日は、木村先生、基調講演におかれましては大変に難しい言葉を、わかりやすくご解説いただきました。勉強になりました。また三人のシンポジストの先生方も、なるほどさすが専門の活動例の中で得たご経験、ご見識をあますことなく披露いただきまして、大変ありがたく存じます。また前田先生におかれましては、司会の労をとっていただきましてありがとうございます。また会場にいらっしやる皆様におかれましては、週末の梅雨の合間の晴天の好日にも関わらず、本学に足を運んでいただきまして改めて御礼申し上げます。週でございます。それではこのシンポジウムを閉じさせていただきます。皆様、お疲れ様でございます。